

# 歴史散歩

文——多古町郷土史の会

## 法王山頭実寺

東松崎一九三三番地にある日蓮宗のお寺です。当寺の古文書には「清澄山開祖の不思議法師(空海の別称)が大同三年(八〇八)に開山した寺



日蓮上人が腰掛けたとされる「法論の松」も、現在は三代目



他に先駆け檀林となった頭実寺。本堂には、檀林時代の部材が使われている

◆第12話◆

で、宗旨は真言宗であった。文永年中(一二六四〜一二七四)に行われた日蓮上人と当時の住職円龜(後に日龜)の法論の結果、日蓮宗に改宗した」と記されています。

十一世日耀の時代には、講を開いて松崎檀林となり、後に徳川家康から制札を付与され、水戸徳川家初代頼房からは寺領寄進を受けます。こうして隆盛の道を進めていた当寺ですが、禁制の不受不施派となつて以降は、幕府の弾圧を受けることとなりました。

その後、身延受派に改宗した当寺は、徳川光圀の参詣を機に、水戸徳川家の庇護を受け、川家の庇護を受けることとなりました。その縁あって、光圀直筆の書状が寺宝として所蔵されています。

川島三〇八番地に祀られている、旧川島村の鎮守様です。由緒について神社台帳には「元和二年(一六一六)勧請、祭神は天御中主神」とあり、もとは「七島妙見」と呼ばれていました。

寛政四年(一七九二)前後には、江戸の高名な歌舞伎役者や豪商が当社を参拝していました。また、境内の灯笼等には伊勢松坂(三重県)や江州(滋賀県)、上州(群馬県)、江戸茅場町などの奉納者の名も刻まれています。その繁栄の陰には、旧川島村に生まれ、江戸に住んで東暁と号した絵師・鈴木勘左衛門の存在がありました。勘左衛門は江戸の粋筋



大きな石灯笼などが並ぶ星宮大神



拝殿天井に掛けられた、羽子板に巻物をつけた奉納物

との交流も深かったのです。かつて当社では、拝殿の欄間に絵馬が並び掲げられていたといいますが、今その姿はありませんが、天井を埋め尽くす羽子板の奉納物と、境内の石造物がその時代を伝えています。



## 日本の医者は何様か?

文/国保多古中央病院医局 問合せ ☎762211

今回は医療以外のもの、自動車と日米比較をしてみましょう。名前を聞けば誰もが知っている世界的メーカーで、売上高や会社規模もほぼ同等である2社の、年間総生産台数を総従業員数で割った数値です。これだけで単純に考えると、日本の従業員の業務量はアメリカの約1.5倍ということになります。

- ▼従業員一人当たりの年間生産台数
- ▼アメリカのメーカー24台
- ▼日本のメーカー34台

医療では、日米のベッド100床当たり医師数に5倍以上の差があるにもかかわらず、同等の内容や結果が求められています。医師の仕事は外来、検査、入院、手術、予防接種、病棟管理、当直、当直明けの通常業務、健康診断、企業検診、レントゲンの読影、人間ドック、会議、患者さんや家族への説明、訪問診療、介護保険や生命保険の書類作成と、まだまだたくさんあります。アメリカは仕事が多岐にわたるので、一人の医師が多数の業務を掛け持ちすることはありませんが、また、書類作成などの業務は秘書が行います。一人の医師が通常の日勤を終えた後、そのまま当直業務をこなし、さらに翌日の日勤を行うなどということもアメリカではありえません。日勤の医師は日勤だけ、当直の医師は当直だけを行います。普通に考えれば、30時間以上の連続勤務が体に良いわけがありません。疲労の蓄積は、やがて医療ミスにつながりかねない状況です。



みなさんは、医療現場の現状をどう思いますか?

国やマスコミはこの現状を知っても、日本の医者は怠慢だと考えるのでしょうか? アメリカ並の質を要求するのは、医療従事者のあらゆる待遇を改善しないかぎり、医療現場は完全に崩壊してしまう。選択するのは国民の皆さんですが、実際に国の方針を決定するのは国会や厚生労働省です。また、世論を伝える立場のマスコミも都会にあります。恵まれた場所で暮らしている人々に、地方の苦しみ分かるでしょうか。医療環境において、直接の被害を受けるのは地方なのです。仕事量が増えたにもかかわらず、社会的地位は低下した今日、誰がやりがいをもって医療を行えるでしょうか。現にアメリカのある州では、医療訴訟の多さに医師が居なくなり、ヨーロッパのある国では、医師の先行きの暗さに医学部の学生が大学を辞めてしまつたという事態が起こっています。日本で医学部は人気がありますが、今年受験者数が頭打ちとなりました。医療訴訟や社会的な待遇の悪化が影響したのではないかと分析も出ています。当院にも研修医の先生が来ていますが、多忙で訴訟のリスクが多い診療科には行きたくありません。国からは医療費削減を迫られ、マスコミからは過剰な報道、また、患者さんからは医療裁判に訴えられることもありま

## 追跡レポート! ——この職業・この人たちの24時間



### 足元からもエコライフ 靴屋さんの一日

紹介者: 金村昭彦さん(仲町)

家業である靴店を継いだのは私が23歳の時で、当時は靴やかばんの販売と簡単な靴の修理を行っていました。ある時、ショッピングセンターに靴の修理屋が欲しいと頼まれ出店したことがきっかけで、靴の修理のほか、リメイクも手掛けるように…。現在は国道店で通常の販売を、仲町店で修理とリメイクの作業を行っています。近隣の靴店はもちろんのこと、全国の方々から修理やリメイクの依頼を受けるようになり、月曜日は品物の配送、火曜日から日曜日を作業に当てています。

インターネットが普及し始め、リサイクルへの関心が高まってきた1995年頃、ただ靴を売るだけではなく、他店にはない独自性を出したいと考え、全国でも珍しいスニーカーの修理とリメイクをやっつけようかと決断。お手本がないので、試行錯誤を重ね

ながら、やっと現在のスタイルにたどり着きました。今では、定番ものから、特殊な構造のスニーカーまで修理します。

また、靴のリメイクは革・デニム・絹などを使い、デザイナーと相談しながらデザインを決めます。左右で微妙に大きさが異なるため、片方ずつ型紙をとり、その型紙にあわせて切った布地をのりで靴に貼り付け、ミシンで縫い付けます。古い靴も新品の靴も、お客様の要望に合わせて合わせながら、機能的にもデザイン的にも満足いただける、オリジナルの靴へと仕上げていく…。お客様との協力による「ものづくり」の過程と、仕上がった靴を喜んでもらえることが、この仕事の醍醐味です。

販売の傍ら、積極的に靴の修理をするということは、相反するように思われるかもしれませんが、靴の販売数が減ることになっても、思い入れや思い出のある靴は、愛着を持って大切に履き続けてもらいたいですね。



取材協力: カナムラ靴店